第５回　戦後７０年、謝罪すべきか？

Ｉ Ｔ生

赤誠という言葉がある。幕臣勝海舟が好んで使った。うそいつわりのないまごころと、広辞苑は記す。勝海舟は「赤誠」があるかいなかを、人物をはかる尺度としていた。私利私欲に走るのではなく、社会の未来に責任をもつ気概があるかどうかをみた。

戦後７０年に際して、「謝罪」するかしないかが争点になっているかのようにみえるが、国際社会が日本に求めているのは「謝罪」ではなく、「事実」にまごころをもって向き合うかどうかだ。

「まごころ」があるかいなかは、つまり、国際社会の将来に対してどう責任をもつかどうかをみられている。歴史の解釈の問題ではない。日本（のみならず）、太平洋戦争・第二次世界大戦で、侵略、虐殺行為をはたらいたことは紛れもない事実だ。そうした事実を国際社会に認め、反省の意を示すことは、国際社会の未来に責任をもつこと、戦争を起こさない「創造的な国際社会」の建設に貢献する明確な意思があるかどうかが問われているのだ。そのことを、われわれは認識するべきだろう。

ともすれば日本人感覚でいうと、「侵略を認めること」は、卑屈な「謝罪」であり、「自虐的行為」であるという後ろ向きの議論になってしまうが、国際社会では、過ちを認めることは、きわめて参加意識の高い行為なのだ。

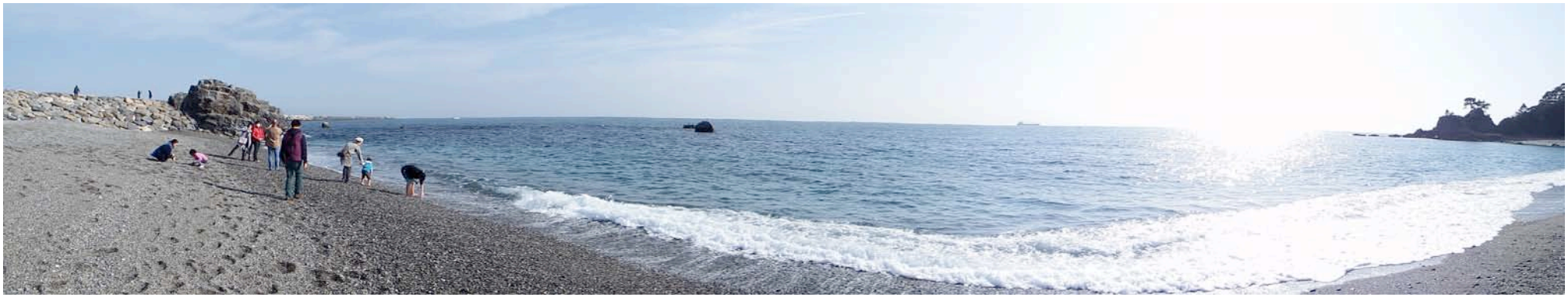
災害に際しても、住民を守れなかったということで公的機関は謝罪するが、全くの間違いだ。反省点を踏まえ、社会の構成員である住民とともに、災害の被害を減ずる「創造的な減災社会」づくりを呼び掛けるべきなのだ。

寺田師いわく、

> ー　人類が進歩するに従って愛国心も大和魂も進化すべきではないか。天災の起こった時に始めて大急ぎでそうした愛国心を発揮するのも結構であるが、昆虫や鳥獣でない二十世紀の科学的文明国民の愛国心の発露にはもう少しちがった、もう少し合理的様式があってしかるべきではないかと思う次第である　ー　（昭和９年）

「二度と過ちを繰り返さない」と「いのちを守る」という言い回しは、一見同じ意味のようにみえるが、前者はシステム構築にはしりがちだが、後者は道徳的である。人間が社会を理解し、共感をもって健全な社会づくりに参加するということは、不断の努力が求められることであり、それこそ、人間らしさなのである。そのことを、寺田師は「昆虫や鳥獣でない」と、あえて厳しい言い方をもって諭しているのだ。

（平成 27 年 8 月）



高知県の桂浜から望む太平洋。古来から津波の犠牲者を生み、多数の戦争の犠牲者をのみ込んだが、人間にとっては生命の根源でもある